

## 探究する心を育むⅣ

○杉浦真紀子 伊集院理子 伊藤綾子 上坂元絵里 佐藤寛子  
高橋陽子 灰谷知子 渡辺満美 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

## I. はじめに

本園では、「探究力・活用力が発揮される生活」というテーマで、4年にわたり実践事例をもとに研究をしてきた。1年次、子どもが好んで関わる「透明」なものに着目し、その魅力に迫ることで「探究の道筋」を明らかにした。2年次は、子どもが遊びの中で思いを実現するときや、遊びを創り出すときに必要不可欠なものを「道具」と定義し、「道具」と関わる子どもの姿に着目した。そして「道具」との関わりが深まることで、より考えたり工夫したりしようとする探究へとつながっていくと考えた。3・4年次は、「もの」との関わりの中で生き生きと動き出す子どもの「からだ」そのものに着目した。子どもは、自分らしくあることを保障され安心感を得ると、周りのもの、ひと、ことに触発され、からだ思わず動き出す。そして動き出した子どもは、さらに周りのもの、ひと、こととつながりながら、探究を深めていく。そこには、どのような教師の援助が必要なのだろうか。本研究では、「探究する心を育む」ための教師の援助について、実践事例をもとに省察していく。

## II. 事例

この事例は、年長児だけの午後の幼稚園での出来事である。子どもたちの思いを感じ、担任のみならず、様々な教師が代わる代わる関わったので、特に印象深い出来事として記憶に残った。そこで、一人ひとりの教師が、子どもに関わったときの状況や子どもたちの様子、投げかけた言葉などを一枚の紙に順に記してみることにした。その後、写真と合わせながら、さらに整理する作業を重ねていった。

<事例> 「長くつながった輪つなぎ」 5歳児7月  
昼食後、担任とA児たちとで廊下に机や糊などを準備し、七夕の笹飾り作りが始まった。

**B教諭(養護)**;机の上で真剣に輪つなぎを作るB児の横に座り、一緒に作り始めた。C児も加わり、輪つなぎがたまと「長いね」と嬉しそう。C児は横の席のD児にも「つなげよう」と誘いかける。

**C教諭(年少担任)**;通りすがりに「床につくくらい長くなるかしら?」と声をかけた。しばらくするとC児が「見て!長くなったよ」と輪つなぎを見せてくれた。

**D教諭(年中担任)**;輪つなぎが重くなり、床に落ちたのを目にしたので「長くなったね、床でやってみる?」と声をかけた。子どもたちは輪つなぎを床に下ろした。

**A教諭(年長担任)**;C児が「すごいんだよ!」と呼びに来た。「私とどっちが長い?」と思わず輪つなぎの横に寝てみる。「先生より長い!」と子どもたち。そばにいたD教諭を誘い、大人2人でつながって寝てみると、輪つなぎの方が少しだけ長かった。

**G教諭(年長担任)**;廊下からはずむ声がかえった。保育室にも廊下の楽しい雰囲気伝わるといいなと思い「つながっててすごいんだ

よ」とつぶやいた。それを聞いて、数名が廊下の輪つなぎに加わっていった。

**E教諭(副園長)**;歓声に誘われ職員室から廊下へと出てみた。輪つなぎの長さを自分たちのからだを使って計ろうと、4人の子どもがつながって寝転んでいた。F児が輪の数を数え始めた。一生懸命数えようとするが、とばしたり数が分からなくなったりする。そこで一つ一つ指さしながらF児の声に合わせて数を数えた。

**H教諭(年中担任)**;B児が職員室を何度も覗きに来る。開けた戸からは、床に置かれた輪つなぎが見えるが「これだけじゃないよ」と言う。廊下の左右にさらに長くつながっていることがうかがえた。

降園が近づき、輪つなぎを廊下に飾ろうということになるが、子どもたちの手は止まらない。少しでも長くつなげようと、紙に糊をつける人、それを次々つなげる人と役割を分担する姿が見られた。また、輪つなぎの先端のところに紙と糊を持ってきてつなげる姿や、いくつかつなげた輪を持ってきてつなげる姿など、様々な工夫が生まれた。降園時間が迫り、子どもたちから輪つなぎを受けとった**C教諭、F教諭(年少担任)**は、急いで廊下に飾った。子どもたちは、飾られた輪つなぎを嬉しそうに見上げながら、降園した。

## III. 考察とまとめ

年長組で取り組み始めた輪つなぎ作り。B教諭は、その場を支えたいと願い関わった。B児の横に腰を据えたことで場が安定し、「つなげたい」という思いで子どもたちが集まってくる様子がうかがえる。教師は、子どもたちの姿を目にして思わず声をかけているが、それが子どもたちの動きをさらに誘い出す。A教諭は子どもに呼びかけられ、とっさに輪つなぎの横に寝てみる。そばにいたD教諭もその面白い発想に共感し、すぐさまA教諭とつながって寝てみる。こうした動きは子どもたちの次の動きへとつながっていく。今度は自分たちのからだを使ってやってみたく、子どもたちのからだは動き出す。担任であるG教諭は、保育室にいる子どもたちにもこの楽しい雰囲気を共有して欲しい、つながって欲しいと願い関わっている。いずれにしても教師たちは、子どもと向き合うこの時間を楽しみつつ、より豊かになることを願って保育をしているということが、記録を振り返ることで見えてきた。

これらの考察から、教師自身がその場の雰囲気を楽しみ、即興応答的に関わっていくことで、子どもたちは自ずと周りのもの、ひと、こととつながろうと動き出すことが明らかになった。教師は、そのような子どもの動き出した姿を捉え、子どもたち一人ひとりが周りのもの、ひと、ことと自らつながることができるよう援助することが大切であると考えた。また、教師一人ひとりが自分らしく保育をしていくこと、それを教師同士が互いに認め合うことも重要であろう。

探究する心を育むためには、こうした教師の援助や連携が必要だと考える。